

シンガポール日本人学校の教務主任を通して考えたこと

前シンガポール日本人学校小学部クレメンティ校 教諭
福井県福井市森田小学校 教諭 吉田 知也

キーワード：シンガポール、クレメンティ校、教務主任、協働

1. はじめに

平成28年4月から3年間、シンガポール日本人学校小学部クレメンティ校に勤務した。最後の年は、教務主任として学校運営に携わることができた。日本で経験のない仕事をさせてもらう中で、多く感じるがあった。今後、同じような経験をされる先生方の一助になればと思い、記録を残そうと考えた。

2. シンガポールという国について

正式国名はシンガポール共和国（The Republic of Singapore）。人口は約547万人、面積718.3km²と、東京23区や淡路島とほぼ同じくらいの小さい島国である。

今から約200年前、東西アジアを結ぶ要所として香辛料を取引する貿易港として栄えた。その後、イギリスの植民地となり、錫の取引やゴムのプランテーションにより発展を続けて、中国南部やインド、マレー半島から多くの人々が移り住むようになった。

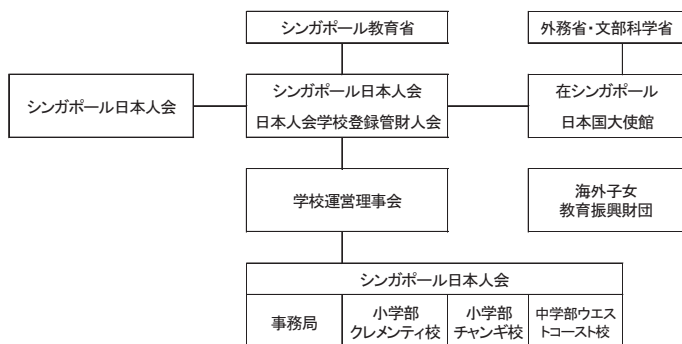
第二次大戦中、日本軍の占領下におかれ、「昭南島」と名称を変える。戦後は、再びイギリスの植民地となるが、1963年マレーシア連邦の一部として独立。しかし、2年後の1965年8月9日にマレーシア連邦から分離独立し、現在に至る。この国は、多民族が共存するため法律を大切にし、資源を持たない小さな国だからこそ教育活動に重きを置いて、経済発展した。（国歌である「マジュラ・シンガプーラ」はマレー語の歌詞であり、その歴史的経緯が伺える。）民族構成は華人系74%、マレー系13%、インド系9%、その他4%と多民族国家であり、その宗教も仏教、イスラム教、キリスト教、ヒンドゥー教など多岐にわたっている。当然、使われている言語も多様であるが、公用語はマレー語、英語、中国語（マンダリン）、タミル語（南インド語）の4つとなっている。仕様通貨はシンガポール・ドル（※1S\$=80円ぐらい）である。

3. シンガポール日本人学校について

(1) 概要

シンガポール日本人学校はシンガポール日本人会によって設置・運営されている私立学校である。日本人学校運営理事会により2つの小学校と1つの中学校が運営されている（※資料①）。入学するためには、いくつかの条件がある。その1つが、日本人会に入会していることである。また、日本の国籍を持つことは必須ではない。日本以外の国籍の両親が、我が子を今後日本で生活させていきたいと考えて、入学を希望し、通学している例もある。

学校の規模としては、世界にある日本人学校の中でも児童生徒数の多い大規模校と言える（※資料②）。そのため、小学部クレメンティ校だけでも、日本人の教職員が日本全国から集まっており、約50名ほど勤務している。



資料① シンガポール日本人学校の組織図

小学部クレメンティ校

学年	1年	2年	3年	4年	5年	6年	合計
男	86	74	86	70	65	68	449
女	63	76	55	65	52	61	372
合計	149	150	141	135	117	129	821
学級数	6	6	5	5	4	4	30

小学部チャンギ校

学年	1年	2年	3年	4年	5年	6年	合計
男	91	98	74	86	66	50	465
女	91	83	93	74	58	48	447
合計	182	181	167	160	124	98	912
学級数	7	7	5	5	4	3	31

中学部ウエストコースト校

—シンガポール日本人学校全体—

学年	1年	2年	3年	中学部合計	クレメンティ校	チャンギ校	総合計
男	86	84	76	246	449	465	1160
女	76	79	54	209	372	447	1028
合計	162	163	130	455	821	912	2188
学級数	6	6	5	17	30	31	78

(2018年4月15日現在)

資料② シンガポール日本人学校の児童・生徒数

(2) クレメンティ校の特色について

本校の願いは、21世紀に生きる日本人として「豊かな国際感覚をもち、世界の人々とつながろうとする人材の育成」であり、その達成に向けて以下の5つの具体的な取り組みを行っている。

その中でも、日本の学校と比べて特徴的なものを2つ挙げる。1つ目は、イマージョン水泳・イマージョン音楽である。外国人の先生が週1時間ずつ音楽と水泳の授業を担当し、指示は全て英語で行う。英語の習得のための英語の授業ではなく、授業内容を理解するための英語を聞いて、英語に慣れ親しむ活動であり、この取り組みは約30年ほど前から行われている。つまり、児童は習熟度別の週3時間の英語に加え、イマージョンの授業が2時間あるので、週5時間英語に触れていることになる。日本でも外国語が教科化するが、保護者の強いニーズがある英語に対して、大変力を入れて取り組んでいることがわかる。

- ①「生きる力」を育む基礎・基本の徹底
- ②英語教育の重視
- ③国際理解教育と現地校交流の推進
- ④ICT教育の充実
- ⑤家庭・地域との連携

2つ目は、ICT教育の充実である。学校はWi-Fi環境が整っており、学校の敷地内ならばどこでもインターネットに接続できる。そして、4～6年生教室には、1人1台使用できるクロームブックが常設してある。(1～3年生は、図書室や準備室にそれぞれ80台ずつ、160台のクロームブックがある。)クロームブックとは、ノートパソコン型の情報端末であり、ローカルディスクを持たずにクラウド上でデータを保存・管理する仕組みをもつ。児童・保護者には、あらかじめ一人ひとりにGメールのアカウントとパスワードが割り振られており、それを使ってグーグルドライブにアクセスして自分の学年・学級のフォルダに作ったものを保存するようにしている。当然、データはクラウド上にあるので、ネット環境があれば、いつでもどこでも見られるので、自宅で保護者も見ることができる。また、そのGメールを使って、学年や学校のお便りだけでなく、YouTubeを使った学校行事(音楽祭や運動会など)の様子もライブ配信している。児童



クロームブックを使った授業の様子とYouTubeを活用しての音楽祭のライブ配信画面

には、情報収集、処理、活用能力を育てつつ、情報モラル・セキュリティなどを含めた指導を行い、道具として情報端末を活用できるよう取り組んでいる。

4. 教務主任としての仕事

教務主任の仕事は、学校教育法施行規則第44条4に次のように規定されている。

「教務主任は、校長の監督を受け、教育計画の立案その他の教務に関する事項について連絡調整及び指導、助言に当たる」

つまり、校長が思い描く学校像や教育のビジョンを共有し、その具現化を図るために、主に実務的な仕事を行うことである。具体的に取り組んだ内容は、以下のようなものである。学校組織として必要なものと、日本人学校における特別な役割のものがある。

【日本でも行っている教務主任としての主な仕事】

- ・教育課程の作成
- ・授業参観や運動会、音楽発表会などの学校行事の提案文書作り
- ・出席簿の点検・管理（月末）
- ・週案簿や授業時数の点検、管理（月末）
- ・通知表原本の作成（特別の教科 道徳の教科化の反映）
- ・校外学習や宿泊・修学旅行への引率
- ・月予定や週予定の文書作成提案、実施
- ・PTA 担当からの連絡や確認（新聞作りミーティングルームの予約など）
- ・補教計画を含めた担任や関係機関との連携 など

【日本人学校の教務主任としての主な仕事】

- ・登下校バスの対応や電話の対応
 - ・入学希望の保護者と連絡調整
 - ・編入試験の実施（入学の条件の確認や校長との面談実施のための日程調整を含めて）
 - ・学校施設見学を希望する保護者や卒業生への対応や校内の案内
 - ・学校説明会の運営や説明（運営理事会や新入学希望保護者へ）
 - ・教材の注文や学力テストや体力テストの取りまとめ（日本の業者への連絡郵送など）
 - ・修学旅行で来校を希望する学校との連絡調整
 - ・日本の教育機関からの視察団体への案内や説明
 - ・著名人講演会やコンサートの連絡調整
 - ・事務局（※）との在籍管理のための連携
 - ・編入書類の確認、退学書類の作成
 - ・成績証明書や在学証明書の作成
 - ・SMS を使った保護者への緊急連絡（雷雨、野犬、黒コブラ、野猿など）
 - ・日本語補習校からの連絡相談 など
- （※事務局とは、主に学校運営の経理を担当し、スタッフ10名で運営している。）

振り返ってみると、特に外部からの問い合わせに対して、気を遣うことが多かったように思う。クレメンティ校では、児童数約800名の内、1年間で200名ほどの転出入がある。日本から来る児童のみならず、外国の小学校から転校してくる場合もある。様々な地域から形式の異なる指導要録の写しが送られてくるため、その確認には多くの時間を必要とした。中には、特別な支援を要する児童もいるため、その受け入れには管理職だけでなく、中学部やチャング校の教務主任に連絡したり、学校運営理事会の開催を待って解決したりすることもあった。更に、保護者からは転入に際し、外国の小学校なのであらかじめできるだけ多くの情報を得ようと問い合わせがあり、その度に対応を迫られた。

また、当然のことであるが、教務主任として任された仕事を確実にを行うためには、学校職員全体での共通理解も必要不可欠である。そこで、上記のような仕事を円滑に行うために取り組んでいたことをまとめてみた。

- ①月・木の朝の校長室会議（参加者：校長・教頭・教務・校務・事務局長※）
その週の予定を確認したり、懸案事項を話し合う。
- ②企画会・学年主任会（参加者：校長・教頭・教務・校務・学年主任・生徒指導主事）
職員会議の提案事項を確認し、管理職からの案件を話し合う。
- ③四役会（参加者：校長・教頭・教務・校務）
職員会議の原案などについて話し合う。
- ④終礼での連絡（月・木の放課後に行う打ち合わせ）
- ⑤PCソフト「ミライム（予定・メール共有システム）」やGメール、Gドライブを使つての連絡相談
- ⑥昼食会（昼食を管理職やスタッフ、担任以外の先生と一緒に）

私が教務主任になり始まったものは、③管理職との四役会と⑥昼食会である。この中で特に大事なものは⑥だと感じた。学級担任の時は、子ども達と席を並べ一緒に弁当を食べながら児童理解を図ってきた。それと比べ、いろいろな県や地域から来た先生方やローカルスタッフの方と昼食をとることで、会話がはずみお互いの気持ちを分かり合える時間をたくさんもつことができたように思う。また自身の教育観を再考できただけでなく、日本人をより強く感じることもできた時間でもあった。

5. 日本人学校の経験を通して

シンガポール日本人学校では、3年間勤務した。1年目は学級担任として、まずは職場環境に慣れ、在籍年数の多い同僚から業務内容を教わり、年間計画に沿った学校の流れを知った。2年目は学年主任となり、学年の若い先生方をまとめることに苦心した。県ごとに異なる指導法について議論したり、世代間ギャップを埋めるためこれまでの経験を丁寧に説明したり、時には自宅に招いて食事をしながら信頼関係を築けるよう努めた。若い世代とじっくり語り合う時間は自身の初心を振り返り、柔軟性の大切さを再確認する貴重な機会となった。そして、3年目は、教務主任として学校運営に携わった。学校の特色を生かしながら、これまでの教員生活で得た知識や経験を加味して、教育課程を新しくしたり学校行事を精選したりして、子ども達にとってより有意義な教育活動となるよう努力した。

そこで学んだことは、「広い視野」と「自分軸」をもって協働することである。学級や学年のことだけでなく、学校という組織にとって何が大切かを考え動く人間が管理職以外にも必要である。立場が変わると、毎日仕事をしている学校でも見える景色が変わる。当たり前と思っていたことも再度広い視点で見直すことで、新たな課題や意義を見い出せることを実感した。そして課題解決には、より多くの人と協働することが必要であった。経験値の異なる同僚や管理職、文化の異なる現地スタッフ、価値観の異なる保護者、様々な相手と対話するとき、突きつけられたのが自分軸だった。「あなたの考えは？」と何度も問われた気がする。その度に磨かれた自分軸が、新たな課題を選択するときの指針となり、円滑なコミュニケーションに繋がったように思う。

日本に戻り4ヶ月が経つ今、目の前にいる子ども達や保護者、同僚は同じ日本人同士であるが、一人ひとり違う多様な考えを持っているのだと、あらためて気付かされた。つまり、どこにいたとしても誰かと一緒に働く以上、求められる力は変わらないのだ。3年前の自分と変わったことがあるとすれば、ほんのちょっぴり人としての器が大きくなったことかも知れない。多様な価値に触れて生活する中で、立場の異なる相手を受け止める術を知った。また、多忙な毎日に追われ心が疲弊したときは、シンガポールの青い空を思い出し、日本全国、世界各地で活躍している仲間を想うと心がふっと軽くなる。このことは今後の人生を間違いなく支えていくだろう。

参考資料：シンガポール日本人学校平成30年度学校要覧